

## 論文要旨等報告書

氏名	渡辺 朱理
授与した学位	博士
専攻分野の名称	歯学
学位授与の番号	博 甲 第 4 0 9 8 号
学位授与の日付	平成 2 2 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻(学位規則第4条第1項該当)
学位論文題名	歯科臨床における感染予防対策意識と行動についての現状と課題 -某県 歯科衛生士会会員に対する意識調査から-

論文審査委員 教授 大原 直也 教授 森田 学 准教授 前田 博史

### 学位論文内容の要旨

#### 【緒言】

外科的処置を伴う歯科医療では、患者の唾液や血液に曝露されるリスクが高い。現在、ヒト免疫不全ウイルス感染者の増加や高齢者などにおける肺結核の再燃に加えて、B型あるいはC型肝炎をはじめとする、様々な感染症を有する患者の歯科診療の機会が多くなっている。さらに歯科医療は、要介護高齢者や易感染性長期入院患者の歯科治療や口腔ケアなどの領域にも広がってきている。そのため、コメディカルスタッフとしての歯科衛生士が感染予防対策に関わる役割はますます大きくなってきており、感染予防対策に対する、よりの確な知識と技能が求められている。これまで私は、歯科衛生士学校生、歯学部学生に対して、病原微生物や感染予防に関する数々の意識調査研究を行ってきた。これまでの研究結果をふまえて、今回、歯科臨床の現場で働く歯科衛生士を対象に、感染予防対策に対する意識に加えて行動について調査し、歯科診療における感染予防対策の現状と問題点を把握し、その対処法などについて考察することを目的とした。

#### 【対象および方法】

社団法人某県歯科衛生士会所属の歯科衛生士 316 名に対し、感染予防対策の意識に加えて、行動を把握するための意識調査を郵送法無記名記述式にて 2008 年 10~11 月に行った。主な質問項目は、「感染予防に対する教育と知識について」、「身体防護用具の装着と交換について」、「針刺し事故とヒヤリ・ハットについて」、「清潔域について」、「職場の人間関係と感染予防について」、「感染予防に関する資格と講習会について」など 23 項目である。回答方法は、「はい」「いいえ」の二択、多種選択および自由記述とした。

統計解析方法は、「 $\chi^2$ 検定」の統計処理を行い、有意水準は、P 値が 0.05 未満 ( $p < 0.05$ ) の場合を有意差有りとした。

#### 【結果】

回収数は 143 名(平均年齢  $38.9 \pm 9.7$  歳)で、回収率は 45.3%であった。

回答の結果、「感染予防対策に関する教育を受けたことがある」との回答が 40.6%、また、「スタンダード・プリコーションなどの感染予防対策を知っている」との回答は 42.7%であった。これを、就業年数で見ると「就業 15 年目より後」の群は、「就業 15 年目以内」の群と比べて感染予防対策に関する教育経験が有意に少なかった ( $p < 0.05$ )。感染予防対策としてグローブ、マスクを着用は 100%であり、グローブの交換率は 81.8%であった。しかし、マスクの交換率は 22.4%であった。一方、防護メガネの未着用者は 90.9%であった。

不潔手袋で清潔域に触れた経験があるとの回答は、94.4%であった。その理由として、「急いでいたので清潔域であることを忘れていた」、「他の歯科衛生士もグローブを外さず、不潔グローブで清潔域に触れていたのよと思った」、「他の歯科医師もグローブを外さず、不潔グローブで清潔域に触れていたのよと思った」の 3 つの理由がもっとも多い回答であった。

また、「人間関係がうまくいっている歯科医師では緊張が緩み、感染予防を忘れる」あるいは「人間関係がうまくいっていない歯科医師では緊張しすぎて、かえって感染予防を忘れる」といった人間関係が感染予防対策に影響を与えていることを示す回答が認められた。

さらに、同じ職場内の感染予防が不十分な歯科衛生士に対しては、「きちんと伝える」という回答が67.2%と最も多かったのに対して、感染予防が不十分な歯科医師に対しては、「何もしない」との回答が63.6%であった。これらを就業年数別でみると歯科医師、歯科衛生士への対応に対して、「就業15年目以内」の群と「就業15年目より後」の群で、ともに統計的に差がみられた( $p<0.001$ )。

感染予防に関する講習会の参加希望に関しては、74.9%が「参加希望」との回答であり、各就業年数別にどの群においても「希望する」が「希望しない」よりも多かった。

### 【考察】

現在、歯科医療においては要介護高齢者や易感染性長期入院患者に対する歯科治療の機会の増加に加え、インプラント治療や組織再生療法など歯科医療の高度化が進んでおり、感染予防対策がますます重要となってきた。そのような中で、歯科衛生士に対しての感染予防対策に関する教育を受けたことがある、また、スタンダード・プリコーションなどの感染予防対策を知っている歯科衛生士は、ともに約4割と半数以下であった。感染予防に関する教育経験の有無については、「就業15年目」を境に有意差を認めた。この結果は、就業後も感染予防に関する最新の知識や技能が修得できる講習会への継続的な参加の必要性を示している。感染予防対策の基本である「マスク・グローブ・防護メガネの着用」に関しては、すべての歯科衛生士が「マスク・グローブの着用」を行っていたのに対し、約9割が防護メガネ未着用者であった。さらにマスクについても交換率は約2割と低く、グローブをアルコール噴霧後、継続使用との回答もあり、感染予防対策の不十分さが示された。これらのことから、早急な感染予防対策の必要性があると考えられる。

清潔域・不潔域の区別では、不潔手袋で清潔域に触れた経験がある歯科衛生士は9割以上と多く、感染予防に対する意識の低さは、診療中の行動においても明らかとなった。また、このような感染予防に対する注意行動が不足する原因として、診療環境や職場内の人間関係が大きな要因であることが示唆された。歯科臨床においても歯科医師、歯科衛生士やその他のスタッフ同士が職場内で勉強会や研修会などを通じてお互いのコミュニケーションを活発にすることで、知識や技能の向上、ひいては安心安全な歯科医療の向上につながると考えられる。

### 【結論】

歯科医療における感染予防対策の向上のためには、歯科衛生士に対する卒業教育としての、継続した感染予防対策教育が重要であると考えられる。そして職場のより良いコミュニケーションの構築などの総合的な対応も感染予防対策には重要である。

## 論文審査結果の要旨

歯科医療の多くは、外科的処置を伴う行為であり、患者の唾液や血液に曝露されるリスクが高い。そのため、歯科医療において感染予防対策は、患者と歯科医療従事者双方の安全を確保する上で重要であり欠かせないものである。さらに、要介護高齢者や易感染性長期入院患者の歯科治療や口腔ケアの必要性が増えたことで、歯科医療は介護施設や病院といった領域にも広がってきており、感染予防対策に対する、より正確な知識と的確な技能が歯科医療に携わる従事者全てに求められている。

本研究は、コメディカルスタッフとして歯科臨床の現場で働く歯科衛生士を対象に、感染予防対策に対する意識と行動について調査研究したものである。これらの研究成果は、2010年2月に刊行予定の日本歯科衛生学会雑誌 第4巻第2号に単著論文として掲載予定で、以下の内容であった。

歯科臨床の現場で働く歯科衛生士 143 名に対し、感染予防対策の意識と行動を把握するために質問調査を行った。その結果、感染予防対策に関する教育を受けたことがある、また、感染予防対策のスタンダード・プリコーション(標準予防策)を知っている歯科衛生士はそれぞれ半数以下であった。すべての歯科衛生士は感染予防対策としてグローブ、マスクを着用しており、患者毎にグローブを交換している者の割合は 81.8%と高かったが、患者毎にマスクを交換する者の割合は 22.4%と低かった。一方、防護メガネの未着用者の割合は 90.9%であり、感染予防対策の不十分さが示された。また、不潔手袋で清潔域に触れた経験のある歯科衛生士は 94.4%と多く、感染予防に対する意識の低さは、診療中の行動にも認められた。また、このような感染予防に対する行動は、歯科医師や患者に急がされる、予定時間の延長といった診療環境や職場内の人間関係の円滑さによって大きく左右されることが認められた。

これらの結果は、安全で安心な質の高い歯科医療を提供するために、歯科臨床における感染予防対策の向上や、さらに歯科衛生士の感染予防対策教育の充実に繋がることが期待できる先駆的研究であり、価値ある業績と認める。

以上のように、本論文は歯科臨床における感染予防対策、さらには歯科教育の分野に十分貢献するものであり、学術上とともに、応用上も貢献するところが少なくない。

よって、審査委員は本論文に博士(歯学)の学位論文としての価値を認めた。